



東京大学 名誉教授
東京大学先端科学技術研究センター
フェロー
谷口維紹

【略歴】

1978年 チューリッヒ大学大学院博士課程修了
1978年 がん研究会がん研究所生化学部
1984年 大阪大学細胞工学センター・教授
1995年 東京大学医学部教授
2012年 東京大学生産技術研究所・特任教授等
2019年 東京大学・名誉教授
東京大学先端科学技術研究センター・
フェロー
米国科学アカデミー及び米国医学アカ
デミー・外国人会員
現在に至る

研究者と学者

しばらく前に、ある高名な先生との会話で「最近、研究者は大勢いるが学者がめっきり少なくなった」との話題が出た。即座に“なるほど”と感じたが、その後何度も反芻してみた；“研究者と学者とはどこが違うのだろう？”。回答はいろいろであるかも知れないが、以下、私の考えを述べてみたい。

近年、科学はその目覚ましい進歩とともに、膨大化し細分化されてきた。結果的には個々の研究者は細分化された専門分野に没入することとなり、全体を俯瞰するということが困難な時代になっている。生命科学でいうなら、自分が行なっている研究が、生命全体の中でどういう位置づけにあるのかがわかりにくくなってきている。加えて、競争的資金の獲得や研究室の管理・運営などで忙殺されることも多くなり、学問がどうあるべきか、国際的な協調はどうあるべきか、などについて腰を据えて考え、議論する機会も少なくなっているのではないだろうか。

言うまでもなく、科学とは現象を記述するもので、絶対的真理を確立するものではない。そして基本前提は仮のものであり、絶対不変ではない。また反証可能性を持ち、検証可能な

予測ができる。これらが科学の特性といえよう。科学を科学たらしめているのは、導いた結果の正しさではなく、その導き方なのである。このように考えると、科学においてとても大切なことは、新たな発見を追求することと同時に、科学では何がわからないのかという「科学の限界」を知ることなのであり、これがまさしく科学者に必要とされている見識なのではなかろうか。

一方で、科学を社会全体に正しく理解してもらうための努力もまた重要である。昨今、“啓蒙”という言葉はあまり使われなくなっているが、イマヌエル・カントは「啓蒙とは何か」という著書において、人間の理性について“私的使用”と“公的使用”とに区別している。研究者が自分の研究分野に立ち、あるいは自分の研究分野のために知性を使用したり、あるいは企業人が自分の企業人としての専門的視点から、あるいは会社の利益を生むために自分の知性を使用するのはあくまで私的使用とされる。では公的使用とは何か。個々の理性にもとづく思考、一人の市民として、専門分野や個人の利益を超えたところで知性を使うことが公的使用である。そういう視点からみれば、例えば東日本大震災や最近のコロナ禍において、研究者あるいはその団体は、理性の公的使用という視点から社会への発信を行ってきたであろうか？学者とはこのような理性の公的使用を（意識的あるいは無意識的に）行える人物を指すのではないだろうか。科学者が社会と信頼関係を持ち続けるためにも、理性の公的使用は重要であろう。昨今話題に出ている“学問の自由”も社会との信頼関係によって保証されていくのではないだろうか。

研究者が自分の専門領域の事のみよく知っているだけでは困るのである。自身の研究が、科学全体あるいは世界全体の中でどういう位置づけにあるのかの認識を怠り、論文発表のために研究しているだけでは研究者ではあっても学者とは言えないのではないだろうか。むろん、「言うは易く行は難し」であり、筆者も日々考えながら努力したいと考えている。若い世代の皆さんも「学者とは何か」について、同僚と、先輩と、いろいろな場で語り合っただけならばと考える次第である。